

トップスポーツに関わる女性のアスリート・コーチ・理事 の経験を探る

荒木 香織*

小谷 郁*

抄録

2010年8月、文部科学省により「スポーツ立国戦略」が策定され、「女性のアスリートが活躍しやすい環境の整備」及び「女性の団体職員等への積極的な登用」が明記された。しかし、より具体的に女性の声が施策へ反映されるべきである。さらに、スポーツ心理学の観点からトップスポーツに携わる女性の経験について調査した研究は存在しない。よって本研究の目的は、1) トップスポーツについて多面的に調査すること、2) 女性のアスリート、コーチ、理事及びレフリーの経験を調査すること、3) トップスポーツ界における真の公正性を問うために女性の声を取り上げることである。現役アスリート3名、コーチ3名、理事2名、そしてレフリー1名に対し、半構造化インタビューを実施した。アスリート、コーチ及びレフリーの総獲得メダル数は120個であった。参加者の平均年齢は41.78歳(26-58歳, $SD = 11.32$)であり、インタビュー平均時間は94.11分(64-181分)であった。結果、女性から見たトップスポーツの在り方、女性のトップスポーツの経験、心理的スキルトレーニングの提供、及び政策への提言の4つのテーマが導き出された。そして、女性から見たトップスポーツの在り方を情熱、勝つ経験、世界を知る、及び生活の保障、そして、女性のトップスポーツの経験を説明するテーマとして男性中心、及び差別を定めた。さらに、差別を説明するサブテーマとして、女性への評価、期待される性、派閥による制限、私生活の犠牲、男性によるサポート、そしてハラスメントの経験を定めた。結果をもとに、女性の組織への積極的な参加及び参画、ワークライフ・バランスを達成するための選択肢の多様化、女性のアスリート、コーチ、理事、及びレフリーの経済的安定、セクシュアルハラスメントへの対策と教育、男性の理解とサポート、及び心理的スキルトレーニング及びメンタルサポート提供の充実を提言した。

キーワード：ジェンダー,ヒエラルキー,組織,セクシュアルハラスメント

* 兵庫県立大学 環境人間学部 〒670-0092 兵庫県姫路市新在家本町1丁目1-12

Realities of Japanese Women's Experiences in Elite sport

—From experiences of athletes, coaches, board members, and referee to
policy development—

Kaori Araki * Iku Kodani*

Abstract

Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology in Japan published the strategy for sports nation in August, 2010. Under the key policy two, “create an environment friendly to female athlete,” and under policy 4, “ensure the fair and equitable management of sport associations” were settled. However, there has been no scientific study in terms of listening women's voice to reflect the policy. Moreover, there is no study investigating women's experiences in elite sport in sport psychology area of research. Thus, the purposes of the present project was 1) to explore elite sport from multiple perspectives; 2) to explore experiences of female athlete, coach, executive board member, and referee; and 3) to reveal women's voice to pursuit equity in elite sport in Japan. Individual semi-structure interviews were conducted to reveal women's experiences in elite sport. Participants were three athletes, three coaches, two executive board members at the national organizations, and a referee. All of them were involved in elite sport at the time of the interview and had experiences of participating in the Olympic games and world championships. A total number of medals obtained among participants were 66 gold, 23 bronze, and 31 silver medals. One coach was not coaching at the time of the interview. However, we interviewed the ex-coach because of lack of woman's national coaches in Japan. The average age of the participants was 41.78 yrs. (range from 26 to 58 yrs., $SD = 11.32$). Average length of an interview was 94.11min. (64-181min.). The general categories emerged from the interviews were women's perspectives in elite sport, women's experiences in elite sport, psychological skills training services, and challenging to policy. Under women's perspectives in elite sport, four themes (passion, winning experiences, knowing the world, and security for living) were created. Under women's experiences in elite sport, male domination was an overall theme. Under the theme, discrimination was developed as a theme. Then, finally six sub-themes (evaluation towards women, controlled by hierarchy, expected gender, luck of private life, sexual harassment, and understanding by men) were developed under discrimination. The findings are significant enough to contribute the policy changing and development. Gender equity, balancing life and work, economical stability, education about sexual harassment, understanding by male, and quality services in psychological skills training are crucial for elite sport in Japan.

Key Words : gender, hierarchy, organizations, sexual harassment

* University of Hyogo 〒670-0092 1-1-12 Shinzaikehoncho Himeji, Hyogo Japan

1. はじめに

平成 23 年 3 月に「スポーツ基本法案」の概要が発表され、とくに国民にスポーツをする権利、スポーツ権について注目されている。このスポーツ権に係る項目を平成 22 年 8 月に文部科学省が策定した「スポーツ立国戦略」にもみることができる。「5 つの重点戦略の目標と主な施策」の「2. 世界で競い合うトップアスリートの育成・強化」に「2)女性アスリートが活躍しやすい環境の整備」、また「4. スポーツ界における透明性や公平・公正性の向上」に「女性の団体職員等への積極的な登用」があげられている。これは女性に対する具体的なスポーツ権を示唆するものであり、前向きな取り組みであると考えられる。

ただ、課題点もあげられる。1 つめは参考資料にあげられる、スポーツ立国戦略策定にむけたヒアリングに女性の調査対象がごく少数しかみられないことである。これは、日本のスポーツ界で活躍する・してきた女性のアスリート、コーチ、団体職員の意見や考えが含まれていないことを意味する。2 つめは女性のアスリートへの環境整備が出産・育児に特化した項目であることである。出産や育児以外の経験に対する理解や整備もすすめられるべきである。3 つめは、女性職員の人数が増えることで公平性・公正性が向上できるかのように捉えられることである。

よって、数量的な内容だけでなく、質的な内容にも目を向けられるべきである。シドニー・アテネ・北京のそれぞれのオリンピックでの女子金メダル獲得数は男子に比べて多い。今後とも女性の競技力向上へのサポートを充実させるため、科学的研究は不可欠である。

2. 目的

本研究の目的は、現在活躍中の女性のトップアスリート、コーチ、理事、及びレフリーの競技・指導経験についてスポーツ心理学の側面から調査することにより、1) 女性の視点からトップスポーツについて考察すること、2) 女性のアスリート・コーチがスポーツにおいて何を体験し、それをどのように捉えながら競技生活を送っているかを知ること、3) スポーツ界における真の公正性を問うために女性の「声」を取り上げることである。

3. 方法

参加者

本研究のインタビュー参加者は、トップスポーツに携わる女性のアスリート、理事、コーチ及びレフリーであった。特に現役で国際レベルの試合に参加していることを基準として参加者に調査協力の依頼をした。20 代及び 30 代のアスリート 3 名、30 代及び 40 代のコーチ 3 名、50 代の理事 2 名、そして 30 代のレフリー 1 名の合計 9 名にインタビューへの協力を得た。参加者 9 名の平均年齢は 41.78 歳 (26–58 歳, $SD = 11.32$) であった。また、参加者 9 名が選手として及び

指導者として獲得した総メダル数は、オリンピック競技大会、世界選手権及びアジア競技大会において合計 120 個であり、その内訳は金メダル 66 個、銀メダル 23 個、銅メダル 31 個であった。

調査方法

本研究では質的研究の手法を用いることにより、女性のトップスポーツについて調査することが妥当であると考えた。半構造化インタビューを用い、女性の声を取り上げた。半構造化インタビューとは参加者の反応に合わせ適宜質問を加える、質問の順序を変える等の柔軟性を持たせたインタビュー法であり (徳田, 2007)、参加者の比較的自由的な回答が期待できるため、参加者の考えをより詳しく引き出すことができる (フリック, 2003)。よって、トップスポーツに携わる女性たちが、トップスポーツにおいて何を体験し、また、どのように捉えながら競技生活を送っているかを知ること、また、彼女達の「声」をとり上げることが目的とした本研究においては、適切な調査方法であったといえる。

デモグラフィック項目

質問紙により、年齢、競技名、及び国際レベルの大会における獲得メダル数について回答を得た。回答時間は約 3 分であった。メダル数は、重要性の高い試合であると考えられる、オリンピック、世界選手権及びアジア競技大会における獲得数のみを換算した。

調査手順

まず、兵庫県立大学倫理委員会に申請し、本研究実施の許可を得た。質問者が参加者に直接または、友人を介し調査依頼を申し出た。参加者の都合に合わせた調査日時、調査場所を決定した。これは、参加者が心地よく話ができる環境を自身で設定することが重要とされているためである。

研究者が参加者により指定された場所を訪問することにより、調査を行った。質問紙への回答終了後、インタビューガイドに基づき、半構造化の個人インタビューを実施した。研究参加への同意は、同意書への署名及び、調査参加によって得た。また、インタビューにおいて使用された、種目名、団体名、個人名、及びチーム名などは、研究の過程においては記号等に変換して使用することへの同意を得た。

競技経験 13 年間に有し、スポーツ心理学を専門とする女性研究者によってインタビューを実施した。インタビューは IC レコーダー (Panasonic/RR-US570-S) 2 つを用い録音した。参加者 9 名のインタビュー平均時間は 94.11 分 (64–181 分) であった。

データの扱いについて

インタビュー実施後に作成した逐語録を、倫理的理由により種目名、団体名、個人名、チーム名及び特定のスポーツ表現を記号やアルファベットを用いること

により修正した。そして、全ての参加者に送付し、インタビュー内容について相違の有無を確認した上、研究の資料とする承認を得た。また、研究終了後、研究成果冊子を作成し、インタビュー参加者に送付した。

分析方法

研究者及びスポーツ心理学を専攻する学生2名の計3名で分析を行った。Creswell (2007) による質的研究法を参考に分析を進めた。分析に先立ちICレコーダーの音声データをExcelファイルに書き起こし、逐語録を作成した。その後、逐語録を熟読し、インタビュー参加者の経験を表す重要な発言を、マーカーを用いチェックした。この際、チェックした全ての発言を同等に扱うように注意した。次に、チェックした発言をグループに分類し、それぞれのグループに名前を付け、参加者の経験を表すテーマとした。続いて、テーマの定義を決定した。具体的には、インタビュー参加者が「何を体験したか」について発言の例示も交えながら、テーマに沿って描写した。次に、インタビュー参加者が「どのように体験したか」についてテーマに沿って描写した。最後に、女性のアスリート・コーチ・理事の経験から明らかになった現象についての描写を客観的に行った。

4. 結果及び考察

本研究の目的は、現在活躍中の女性のトップアスリート、コーチ、理事、及びレフリーの競技・指導経験についてスポーツ心理学の側面から調査することにより、1) 女性の視点からトップスポーツについて考察すること、2) 女性のアスリート・コーチがスポーツにおいて何を体験し、それをどのように捉えながら競技生活を送っているかを知ること、3) スポーツ界における真の公正性を問うために女性の「声」を取り上げることであった。

分析の結果 4 つのテーマ 1) 女性から見たトップスポーツの在り方、2) 女性のトップスポーツの経験、3) 心理的スキルトレーニング及びメンタルサポートについて、そして4) 政策への提言を挙げた。また、サブテーマを作成することによりそれぞれのテーマを詳しく描写した。

1. 女性から見たトップスポーツの在り方

女性のアスリート・コーチ・理事・レフリーから見たトップスポーツにおける経験から、スポーツへの思い、海外における経験が重要であること、更に、日本のトップスポーツが抱える課題について指摘された。以下に、女性から見たトップスポーツの在り方について情熱、勝つ経験、世界を知る、そして生活の保障の4つのテーマを挙げた。

情熱：情熱は、女性のアスリート・コーチ・理事・レフリーがそれぞれの競技において全力を傾ける原動力となっている。トップスポーツの現場は、彼女たちの

情熱によって支えられていることがうかがえる。

勝つ経験：競技において勝利することは彼女たちがトップスポーツに身を置き続ける理由となっていると共に、周囲に認められるための要素となっている。

世界を知る：国際レベルにおける競技経験、指導経験及びレフリーの経験を持ち合わせるアスリート、コーチ、理事、及びレフリーは、それぞれの経験から世界を知ることの重要性について述べた。

生活の保障：彼女たちは、それぞれの立場から、生活の保障が重要であると感じていた。勤務形態や有給制度などに焦点をあてることにより、活動の内容について明らかとなった。理事はボランティアである反面、アスリート、コーチ、そしてレフリーは、企業や及び団体などへの所属によって、給与を得ている。報酬は基本的には競技活動に対する報酬ではなく、社員としての報酬であった。競技活動への理解はあるものの、経済的サポートが伴わない現状が見受けられる。

2. 女性のトップスポーツの経験

日本のトップスポーツを生きるなかで、女性であるからこそ経験する内容については大きなテーマである男性中心をもって説明することができる。またその下には差別をテーマとして挙げた。そして、差別をさらに詳しく説明するため、女性への評価、期待される性、派閥による制限、私生活の犠牲、男性によるサポート及びハラスメントの経験を挙げた。

男性中心

日本におけるトップスポーツもまた諸外国と変わらず、男性中心に構成そして運営されていることが明らかとなった。日本オリンピック協会をはじめ各競技団体の組織構成員の性別を調査すると男性数が多いことは明確である。しかし、男女の人数を比較することから意味のある議論はできない。インタビューを通し、男性の視点や価値観が大きく影響される環境において組織、運営されているトップスポーツの現状が女性の生きた声により明らかとなった。

女性による男性の支配に対する気づきの有無や度合いはそれぞれ異なる。しかし、トップスポーツを通して生きてきた年数が長いほど、男性中心のなかで活動する女性の経験について意識的に語られることとなった。

差別

差別とは女性がゆえに経験する、ポジティブおよびネガティブな経験であり、女性が男性優位である組織の中で感じていることや実際に経験したことを表す。経験を通じ様々な感情が混在することが理解できる。男性を中心に組織・運営されている女性のトップスポーツの経験を女性への評価、派閥による制限、期待される性、私生活の犠牲、男性によるサポート、及び、ハラスメントの経験をテーマとして解明していく。

アスリートは競技場において、また競技以外での待遇においても男性と比べることにより公平でないことにいらだちを覚えていることがうかがえる。特に、私生活のコントロールを男性コーチにより強いられ「高校生みたいな扱い」を受けていると感じていることはハラスメントにもとらえうる内容である。また、アスリートのストレスは日々の練習や試合などにも影響する可能性は否めず、競技力向上の視点からも問題があると考えられる。また、男性と同じ行動や発言についても、女性であるがゆえに周囲の対応や反応に違いがあることについてはコーチにも経験がある。

女性への評価：評価とは、女性コーチの指導力が、女性であることのみを理由として男性より劣るとされることである。コーチの経験する差別は、性別と関連付けられた能力の評価にあることが明らかとなった。インタビューを通し、男性が中心となり成り立っているトップスポーツの場面において、女性は常に男性からのネガティブな評価を受けていることがわかる。

期待される性：女性の経験する差別は、実際の性（女性）と現場で期待される性が相違する点にある。男性は、女性が女性であることを考慮せず、男性と同一化することにより、活動しやすい環境の確立を進めている。女性が男性中心のトップスポーツを経験することは、女性が女性であることを制限されていることにつながる事が分かる。しかし、場面によっては、女性が女性であることを要求するといったことも起きている。このような複雑な仕組みは、アスリート、コーチ、そして理事のすべての立場に共通して存在する。

派閥による制限：女性の経験する差別は「派閥」である。派閥とは、目に見えるまたは見えない形で女性の活動を制限する権力を表す。男性により形成されている派閥、それはネットワークであり、女性は翻弄される。具体的には、男性のネットワークを中心に、理事やコーチの選出及び選手選考が行われる。コーチに選出されたきっかけとして、自身の同僚や指導者が選出に関係する人物であったという例が多く見受けられる。指導力そのものもさることながら、男性のネットワークにより、女性は影響されている。派閥により決定された事項が、女性コーチにとって十分に納得のできるケースではないこともある。

私生活の犠牲：女性の経験する差別は「私生活の犠牲」である。私生活の犠牲とは、ひとりの女性として当たり前の権利である結婚、出産、および育児を自由に経験できる環境にないことを示す。これはコーチにとって特に深刻な現状である。

このような状態にある原因は、それぞれのコーチとしての強い責任感、女性指導者数が少ないこと、そして、サポート体制が整っていないことにあると考えられる。

男性によるサポート：男性によるサポートとは、女性の能力や可能性に対する理解および理解に従う実際の行動を示す。女性の経験する差別は「男性によるサポート」である。女性はこれまで、男性の理解やサポートを受けながらトップスポーツに参画をしてきた。また男性のサポートなしでは、女性の経験はないことから、トップスポーツの在り方が男性中心であること否めない。

ハラスメントの経験：女性の経験する差別は「ハラスメント」である。本研究におけるハラスメントは、男性指導者または理事によるパワーハラスメント及び、セクシャルハラスメントをさす。これまで、女性は様々な形でハラスメントを受けてきているが、その事実は決して表面化されてきていないこともうかがえる。

3. 心理的スキルトレーニング及びメンタルサポートについて

アスリート3名、コーチ3名、及びレフリー1名の合計7名へ心理的スキルトレーニング及びメンタルサポートについて質問をした。結果、心理的スキルトレーニング及びメンタルサポートについてのイメージ、経験の有無、実施頻度、サポートの内容等はそれぞれ異なっていた。全体的に日本において、心理的スキルトレーニングは未だに競技力向上にとって不可欠なトレーニングとして認識されておらず、実施は進んでいないことが明らかになった。心理的スキルトレーニング及びメンタルサポートの現状について述べる。

アスリート3名のうち1名が定期的にメンタルサポートを受けている。また、コーチ3名のうち1名は1度もメンタルサポートを受けた経験がなかった。また、コーチについては、コーチとして心理的スキルトレーニングやメンタルサポートを受けた経験はなく、現役時代の経験について話した。実施内容はそれぞれ異なっており、心理的スキルトレーニングやメンタルサポートについて必要性の捉え方が異なっていた。

心理的スキルトレーニングについては、アスリート、コーチが「宗教的な感じで思ってたから」と話すように、スポーツ心理学を基礎とした科学的な研究の結果に基づいたトレーニングであるといった認識がないことが明らかとなった。また、心理的に問題がある人の為だけのサポートであるといった認識がされていることがうかがえる。一方、コーチングやレフリーングにおいては、心理的スキルトレーニング及びメンタルサポートの重要性が認識されはじめている。よって今後は専門家が、心理的スキルトレーニング及びメンタルサポートの意義について現場に浸透させる必要があることが示唆された。

5. まとめ

トップスポーツに携わる女性たちの声によって示された政策への提言をまとめる。

1. 女性の組織への積極的な参加及び参画

スポーツ界において、偏った役割や責任に限定されない多様な活動への女性参画を進めることが求められる。施策において、女性のスポーツ組織への参画を具体的に表現する必要があると考える。さらに、能力があるにも関わらず、「女性だから」といった理由で人材の登用を避ける傾向を廃止し、男女を問わず正当な能力評価が行われるよう明示されるべきである。

2. ワークライフ・バランスを達成するための選択肢の多様化

女性のアスリート、コーチ、理事及びレフリーが、ひとりの女性として出会い、交際、結婚や出産が選択できるような施策が望まれる。スポーツに関わる全ての人、ひとりの人間として自由に人生を選択する権利が侵害されないよう、ワークライフ・バランスを達成するための選択肢の多様化が重要である。特に、任務分担を可能とするシステムの構築、及び、結婚・出産後にもスポーツにおいて活躍できる支援策の構築など具体的な施策に踏み込むべきである。

3. 女性のアスリート、コーチ、理事、及びレフリーの経済的・生活の安定

トップスポーツに携わる女性の経済的・生活の安定を確保するための具体的な施策は見られず、アスリートに対する「支援の強化」「環境の整備」といった表現に留められている。出産や育児、また子供が合宿や試合に帯同できる経済的または、人的支援についての施策が明示されるべきである。

4. セクシュアルハラスメントへの対策と教育

スポーツ施策にはセクシュアルハラスメントについての文言は明記されていない。よって、セクシュアルハラスメントについての対策を明示し、また、アスリート、コーチ、理事、レフリーを対象とした教育を実施する必要がある。

5. 男性の理解とサポート

スポーツ基本計画には「女性特有の課題解決」が示されているが、女性の置かれている立場や課題についての認識や理解が十分ではないため、「男性特有の課題解決」が必要であると考えられる。よって、具体的な取り組みとともに、今後の施策に明示されるべきである。

6. 心理的スキルトレーニング及びメンタルサポート提供の充実

心理的スキルトレーニングやメンタルサポートについての知識普及のため、国立スポーツ科学センター（JISS）の役割が重要であると考えられる。さらに、地方を拠点として競技生活を送るアスリートにも同様

のサポート体制を確立できるよう、JISSの機能強化が望まれる。

参考文献

- Creswell, J.W. (2007) *Qualitative inquiry and research design: Choosing among five approaches*. (2nd ed.). Thousand Oaks, CA: Sage Publications, Inc.
- フリック：山田・山本・春日・宮地訳 (2003) 質的研究入門—人間科学のための方法論. 東京都：春秋社
- 徳田治子 (2007). 半構造化インタビュー. やまだようこ (Ed.), *質的心理学の方法* (pp.100-113). 東京：誠信書房.

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。



笹川スポーツ財団
SASAKAWA SPORTS FOUNDATION